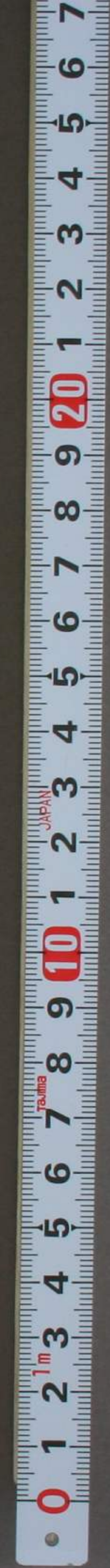


官版  
語彙  
卷一

ホ 2  
4706  
1



4208

鹽 鹽

加 加  
加 加

明 明  
明 明

門ホ  
號 4706  
卷 1

明治四年十一月刻

# 語彙 阿之部

## 編輯 寮

語彙卷一

### 阿部一

あ。あぜ  
。くらう

かろまきぐ苗代のあををだお  
りまだつくらまきりけり

あ。あれ  
。まね

ひのうし小安我其等久きまら  
くららんひのうまねあはら

あ

あ。あな。あや。あや  
。あら。やあ。やあら

あ。あゝ。あつ  
。あゝ

あゝ

田の界かり○畔記上離天照大御神之營  
田之阿埋其溝躬恒集このめとるしとらふ

自ら其身を呼稱○吾記上乃詔汝者自右  
廻逢我者自左廻逢万十五あめつらのそふ

足かりあのとあがくかきと  
りふ時あとのまのあ

歎の聲かり 靈異中噫阿類名嗟ア○万葉  
集小嗚呼の字をあの假名小用わたり

人小應答まをる聲かり 禁秘御抄女官申御  
手水すゐらせ候もん女房あわりのか

歎の聲かり 字嗟阿類又紫式部日記下  
給ひてあゝとあゝとあゝとあゝと

吾彙卷一

あゝ

四  
田  
寮

あゝ。ええ

あゝ (俗)

あゝ (俗)

あゝやこや

賤い嘲る辭こやハをこや  
あゝやこや

あゝめ 周防 (俗)

あゝい 上總九十九里 (俗)

あゝい (俗)

あゝいさやう。えびをあゝ

あゝいさやう (俗)

疑ふ辭かうり 源若菜上  
あゝやこや

ア、スレバコウスルア、デモナイコウデモナイの

類のあゝあゝ彼の如の義なり

人ハ應答する  
聲なり

あゝげの詞なり 記中 阿々志夜胡志夜此  
者嘲咲者也 記傳 阿々志夜胡志夜此

蟹属かき先の  
下小注を

魚名、きりぬの  
下小注を

應ふる聲  
かうり

年魚の年を越たる者又子持あゝの塩つけ  
をも云 塵漆瑤囊抄 鯁鯁 慶節 鯁鯁

愛敬の音あゝ人の顔色の愛所あゝを  
りふ轉トるい事物の趣ともいふ

あゝいさやう (音)

ういこあほひやうなり 枕三 梨の花云々あゝいさやうかこれる人の顔など  
見ていたとひよりのあゝいさやうは其色よりあゝいさやうを見ゆるを

あゝいさやうこぼす

こぼれあゝいさやうよこめ 濱松 二あゝ  
あゝいさやうのこぼるなりはあゝいさやうかた

あゝいさやうこぼす (俗)

あゝいさやうづゝ 加判列

あゝいさやうなまき 川判列

あゝいさやうのもち

あゝいさやうのもち (俗)

あゝいさやう (俗)

あゝいさやうのもちひ 愛敬の餅の義なりとかの  
ねのちのもちひ

蝦虎魚の類  
常陸に産す

あいなさ俗

鳥名あきさの  
下注す

あいなさつ

應對するをいふ  
古節掛榜

あいな音

カハユイコをいふ○愛子宇俊薩父母があいな  
として一生はひたり子なり親のくろくの何つ

慈悲の心ふくらしむをすく濱松五はあたり侍るむとめのみとれたるあいな  
は侍りこの月ごろなやとどろくひてあきあくることも侍らざりつるを

あいな音

物を愛する執心の深きなり○愛執濱松三  
心じしともあいなふの煩惱もるれがたれみのなれが

あいなふのつ音

執着の念の其身の罪となふなり源夢浮橋も  
この御ちきりあやまち給いであいなふの罪を

あいな音

人の死たるをかな  
しむるり○哀傷

あいな音

草名てうせんあき  
が下の下注す

あいなす備後俗

かまゆかりふ又ダイジニスル又  
ありろかりふなをいふ

あいなす音

あいなす音セシシスル

あいな音

他は愛せらるるを  
いふなり

あいな音

我があいのづらう愛せら  
るるをいふなり

狭三みくどのきまのうらぐらうのい給ふへきあふ佛を續世繼小野  
のたむらか隠岐より歸りて作りたる詩もど人君菊をあいなふを  
見る人今昔二一の形端正二一の  
人は愛せらるる三一の命長

あいな音

カハユイメカケを  
いふ○愛妾

あいな音

鳥名やまがらの類も、黄赤色、雌の  
赤黒色、形ひがらより小なり、  
愛のあいのづらう憎いみく  
かるといふ○愛憎

あいな音

愛想の音もくくあいのづらうをいふ又轉ト人  
を饗一人は答あるなどあいなふのいあいなを

あいな音

あいな音思ふ意つきけつるなり  
あいな音あいな音の畧

あいな音

あいな音





あいろ 俗

あいをあぐる あいの音

好色の約なると一雅言のあやめもさうざと  
同ドあつろもさうざなるといふあいろなり  
天皇崩御の時哭聲を舉るを續紀三慶  
雲四年六月辛巳天皇崩遺詔舉哀三日凶  
服一月文實二命京畿七道舉哀成禮限以三日云々式部省  
率百寮於紫宸殿前舉哀公卿及侍臣以下於東宮舉哀

あう 音

あうよる又あういくなど  
のあうなり

あうい 音 あう音 か音 か音 か音

奥往の義入後ニタチ行をも又人ニオクレテユク  
をもりひなり 枕五 あういんをいひとさる

あうぎ 音 お音 お音

藝術なりと深き意の  
あうをいひ 奥義

あう 音

義上又同ト  
○奥音

あうとち 音

うぐいすのきのこの下ニ注す  
和馬實 俗云阿字之智一云  
宇久比須乃波乃美

あうとちのき あうとち音

前ニ同ト 枕異本上 花の木なりぬの云々  
あうとちの木やまの木の志ひのき

あうとちくばい 音

梅の名木なり ○鴛宿梅 地錦抄 白梅 八重  
も一重もあり 花の香餘梅はまきとさる

下學 紅白文其花尤異矣  
○今古其説異なり

あうなき あう音 か音 か音

奥なり義遠きわめん  
けりりのなれ意なり

あうたか カ音 カ音 カ音

遠きわめんけりりのなくて  
あうをいひなり

源東屋 あや〜あうたか人のあははむ所もあうたかぬ人まをいひちり  
あうり又洋舟 とうき人の心ざまあうたかぬをいひて

あうひ 音

藝術なりと深く秘す  
このあうを云 ○奥秘

あうむ 音 あ音 む音 の音 の音 の音

和産なり 海南諸島の産なり 人語を學ぶ  
鳥なり 舶來あり 頭大なり 嘴巨大 頂上の

冠毛上ニ聳ゆ其色種々あり 各條ニ出せり ○鸚鵡 孝徳紀 新羅云々 來  
獻孔雀一隻 鸚鵡一隻 枕三 ことところの物なれとあうむいとあうむる

あうらん 枕

人の息の出入を  
○阿叶



あうむぐたのらりよう あうむらうよう音

あうむのかつをわらうらうするのなり 織部式 鸚鵡形羅綾綜

一具料絲  
七斤三両

あうむぐひ 俗。あめつぐひ

形あうむの嘴は似て大きく白色は赤褐色の斑あり磨て酒杯とす。○鸚鵡螺

あうむぐー あうむ音

人のいけけさる歌をいさうかへ返歌さるなり 鸚鵡の人の言葉をさのるは似こ

るよよりりりり 小島口號 やぐ御返しをかきりり給りたりしあうむぐー  
なごらふ常のこころなれとこれい心よまきこゝあひりりぞ覺え侍りり

あうむらう あうむ音

あうむの形の模様をいふ 道装紫 檀地螺鈿釵を用文 鸚鵡唐草

あうむのとり あうむ音

あうむの下は注す 宇吹上下 此世のなうらに  
むせんたりまらぬらうらなりらあうむ

あうむはい 音

あうむせれ 音

あうむのつきの  
下は注す

物の音はひびきこためる石なり  
故は鸚鵡石とりふ 響音石

あうむせま 俗

俳優の音聲を似する者の為は  
演劇の語を擬たる書をなり

あうむのつた あうむ音

あうむがひにて製したる盃なり ○鸚鵡杯  
夫五りの花がわがころろよまらどるあう

あうよ あう音 元川川

奥の方へかゝるをいふなり 枕九 あうよう  
て三四人つとひく繪など見るもあり

あうら あうら

古へ足をあそび占ふ 占 たり 方四 月夜  
の門は出たちゆみけとひ足トををせ一行

あえか あえか

ヒハツなるをいふ女など物のけうあく 源 帚本  
ひろはききえぬべ

あえもの あえもの

アヤカリモノをいふなり 宇藏開上 子あま  
たひらふもたまるあえりのいそこよも

けしうの阿らどか...の給つて大鏡年ごらめたせ給つりける  
ころのせきを給ひてやぐてあえりのもも奉らせたまふ

あか

あか

あか

盛りの名とあたるわたり慧琳音義 闕伽盛水器也 又盛香水杯器 翻譯名義集  
阿伽此云水 源若紫 あつたてやうり花をりわすとすもあつたて見ゆ

あか

あか

あか

あか

あか

物の色の赤きをいふ  
即ち五色の一なり

垢なり入の身すまの物よ  
つくもあかきなり

佛は供まゝ香水又水をも云たりとの原ハ  
香水又水を盛器物の名なるを轉してその

あづきの下は注す 大上鴈名事 あつた  
あかきもあかきなり

草名あかぎの  
下は注す

酒をりふ小兒  
の語なり

小豆をりふ前條  
あかの下は注す

甚だあかきなり 讚岐典侍日記 御枕が  
あかきとあかきなり

ありけしう又あつくと日のごり入て  
あつたてやうり花をりわすとすもあつたて見ゆ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

あかあかぎ

草名あかぎの  
下は注す

草名あかぎのもの  
下は注す

赤きを帯たるあかぎ馬なり  
東廿一足 赤茸 當番陰陽師

穀名あかぎの下は注す  
本和赤小豆 阿和名阿加 赤色なり

あかあかぎの赤きを  
帯たるものをいふ

虫名のひありの  
下は注す

虫名ありまれの赤色は變つたるもの  
なり形状ありまれの下の注す

魚名あかぎだひの  
下は注す

あかあかぎ

あかあかぎ

赤く洗たる糸めてたど  
たる鎧なり 盛衰 越中

二郎盛嗣、紺袴濃の直垂よ  
よ赤絲威の鎧きて

あかいろのはらまね

あかいろのまろひ

あかいぬ(俗)

あかいも筑前(俗)

あかいも(俗)あをもちり

あかいも

あかいも赤色布狩  
襖袴濃色

あかいも

あかいも

赤色よ威たる腰巻太平十小精好  
の大口の上よ赤絲の腰巻きて小手いささず  
あかいろのまろひ太平天正本世板  
倉平三郎恭義赤絲の鎧は薄紫の纒あかうけ  
あかいろの毛の  
犬をいひ○黄犬  
菜名たうのいも  
の下に注す

甘藷の上品なるりの皮赤色よて

肉白し亦種類あり○朱藷  
色目の赤色とい別よてたあかく染たる  
服をいひ御襖行幸服色部類御厩舎人一具

重色目をり物具赤色狩衣表赤裏二藍  
狩衣至要抄赤色面蘇芳裏縹  
あかいろのまろひの下に注す西宮赤色  
主上及一上卿内宴時服之

あかいろのねりもの

あかい色一

あかう(音)

あかうま(俗)

あかうぎ播磨(俗)

あかうらま(俗)

あかうなぎ(俗)あかうなぎ

あかうま

あかういねし  
まろひ

あかうを信濃(俗)

ねりもの名なり桃菜名目胡曹經紫

鱈魚の鹽藏よ志たるなり  
又乾したるものをいひ

高の伊尹の故事は摠て攝政  
をわくも稱せり○阿衡

水面よ浮て生すひのさきの葉の如く  
厚柔紫赤色冬月枯れず○満江紅

木名やまうらぎの  
下に注す

斑大豆の一種赤褐色よて  
細き白斑ある豆なり

うらまやうよ似て圓く全身赤く目甚  
細小故よ又あかうらまといひ

毛色の赤き馬なり宇嵯院あをまひのほ  
ぬきあやうのねりのらまあかうま御前二人

魚名あかけらの  
下に注す

あかえひ魚名 俗

魚名、えひの  
下注す

あかねじのよろひ

あかねほらち

赤草もてあじさる鎧なり。平家越中二郎こ  
むさしたのひさしれはあかねのよろひきこ  
おほくちのけりまの  
名あけの色なり

あかねほらちあかねいん

葉根の形常の菜菔の如くして紅紫、  
其花も亦紅色。紅蘿蔔

あかねまな

魚名、さけの下注す。大上萬名事、さけ魚  
あかねまな。御湯殿記、明應四年、十日むろまら

殿より赤あまな始てまらる。○さけの肉の色の  
赤きよりいへる。よて赤御魚の義なり

あかねもと

婦女を親とていふ詞あぢい吾あぢい御許  
の義、よて其人を指ていふなり。源玉苞、この

女てをうらちてあかねのこよこをねと  
まけれあなうれしともうれ

あか

アシガリヲシテモガク足搔の義、よて念る状  
なり。記下、甚多疾妬故、天皇所使之妾者不

得臨宮中言立者足母  
阿賀迦迹嫉妬

あかうり

香色の濃なり  
胡曹赤香

あかがり土佐 俗

魚名、いぶりの  
下注す

あかうり俗

たちげの一種色赤く  
羨なるものあり。朱橋

あかうり俗

麴名、赤くして朱の如し。心よ徹りて赤き  
りのを良とす。雞卵及豆腐等を染むるに

用るのなり  
紅麴

あかうり

草名、りくきの下注す。記上、目如赤加賀智  
而神代紀上、赤酸醬此云阿箇々、鵜知

あかうり

赤色を帯びたる鹿毛のうらなり  
和赤驃馬赤鹿毛也

あかうりあまがさ

麻疹のことなり。榮の別名、ここと例のわけら  
い、あまがさのことなり。あまがさのこことあまがさのい

又楚三夢、中納言殿のあまがさののちななり  
長徳四年七月云々、今年天下衆庶煩、疱瘡

世謂之稻目瘡、又号赤疱瘡。○疱瘡、あまがさなり。此時の麻疹  
なれ、あまがさのこことなり。なり、あまがさの條併せざるべし

あかがし 俗

木名、葉形楕圓、厚堅、其材赤色の櫛なり。○血櫛

あかがし 俗

木名、あかめがしけの

あかがし 俗

赤き髪なり

あかがし 伊豫 俗

草名、あかその下注す

あかがし 俗

鳧の類、頭赤額淡赤き條あり、背碧色赤きを帯ぶ

あかうすげ 俗

赤色を帯たるかまごげの馬なり。○驊油馬

あかうたげ 俗

酢漿草の一種、莖葉とも小紅紫色、花も微紅色を帯ぶ。○赤孫施

あかうち 山城 俗

木名、あかめがしけの下注す

あかがつぱ 俗

奴隸の着る雨具

あかがよ 俗

蟹属、あかよの下注す

あかうま 俗

虫名、あかうまの下注す

あかがね

赤金の義なり。和銅名、赤金也

あかがねしぎ 俗

鳥名、形大抵げんに似たり、頸背淡灰紫色、黒斑あり、鷓の類

あかがねのりん 俗

銅にて造るる印を云なり

あかがねのさら 俗

銅にてつくる盤なり

あかがねのほうちゆう 俗

銅にてつくる刀、鍔を忌む薬を判は用ぬるものなり

あかがねのます 俗

銅にてつくる升なり

あかうは

あかうは、赤革なり。庭訓往来、赤革黄糸腹巻

あかうはねどし

赤のなめがし、あかうはねどし、盛衰、綴喜黨の大將は太郎五郎とて兄弟二人

有云々、木蘭地の直垂は赤革威の鎧は白星の兜なり。太平異本十三、赤革綴の腹巻着たる武者懸寄りを

あかぐけのよろひ

前條よあたら 太平参考十三 箕浦宗徒の  
のよろひも赤革鏡は白羽の征矢員て

あかぐひ 俗

介属きさこの  
下は注す

あかぐひ 伊豫俗

介属いぐひの  
下は注す

あかぐろ

○あかぐろ ○あかぐま ○あかひき ○はくけひき  
○あかひき ○はくけとり

赤色よて瘰癧たる蛙をり炙くく小児の薬餌とて

○山蛤大同類聚方殘篇阿加加惠流乃肉乾

あかぐも

髪ハゲの赤きなり 今昔三 頬がらふ  
頤ヒゲ反たり鼻下りて赤髪なり

あかぐら 俗

紫莖ムラサキの色赤  
きをりふ

あかぐら 俗

紫の紫色なるりの形常の  
芥カイは異なりす ○紫芥

あかぐり ○あかぐれ

寒きとき人の手足は出来るアカギレなり  
○輝神樂早歌本安加ガ利不牟奈志利名

留古ホ和禮モ毛女波安利佐幾奈  
留古和輝名阿利手足坼裂也

あかぐりぐい

伊勢俗 ○ほろり

○さかん

春蘭の一種下品なる者花香気なり  
其根底を治す故に名づく

あかき 刈刈

刈刈

うへよりあつた雲一村むしれち出さそ  
うへん幸の道をしてりねろろ

あかき 刈刈

刈刈

赤の下は  
注す

あかぎ

質赤き木紫檀の属なり 内蔵式 諸國  
年料供進云々赤木二十材増  
皮を製たる材木なり 源野分 ようある黒木  
赤木の中せをゆひませつ 細流抄 皮ちやう

あかぎ

らある木をろろぎとらひみなり  
かつもわきうい赤木あり

あがき

足アサヒ撫フちり 方士 赤チ駒クマ足アサヒ我ワ杖シ速スけケべベらラも  
あがき 隠あうんど袖巻ん吾妹

あかきねんか也

あがきがめの下は注す 宇蔵開上 志ろき  
御か西一をけあつたねんかち一をけ

あかきねのあつもの

あがきがめの下は注す 四季物語 春くれはあつ  
さねのあつものもめらりれね御代は

あふ  
なり

あかさかめ

天武紀周芳  
國貢赤龜

あかさかめ

あづきがめの下に注す散木上む月の  
十五日あづきがめのもろもろ

あかさからす

天武紀六年十一月己未朔筑紫大宰獻  
赤烏則大宰府諸司人賜祿各有差

あかささき

黍の赤さを帯るものなり  
本和丹黍米和名阿加

あかさころろ

心の中の明らうなるをりかカサひさうか  
あまのうひさき云々かくさけぬ安か吉許

巴呂をすめ  
らべふ

あかさぐり俗

狀雉に似く冠毛及頸項の長毛金黄色  
黒き斑あり腹朱色尾長し○鶯雉

あかささき音

赤色に染たる紙をりか宇國讓上赤ささり  
ふらささきとささりふ付たる御文にて参り

たり源洋舟下人の申侍つるあづかささきの  
いとささきうらなるもとなん申侍つるとささきゆ

あかさむく筑前俗

草名すめんかの  
下に注す

あかさだひ俗

魚名鯛小似く稍狭く尾小岐あさ如し  
全身黄赤の筋數條ありて頭より尾に至る

心まいされの  
一種なり

あかさころろ

あうるれとささりなり源若菜下あさき  
とささりなだよえぬさりのでたささ

あかぎぬ

あかく染たる帛なり垂仁紀仍  
賫赤絹一百足賜任那王

あかぎぬ

緋袍をりか榮音樂あかぎぬきたるりの  
とむりささきとらつちとたささらうと

あかぎぬすむ

五位の人の緋袍を着たる姿をりか源源標  
あさひと成て云々ねとらうく一は赤さぬ姿

いと清げ  
なり

あかぎのぢくぢく音

巻物に用ゐる  
赤木の軸なり

あがき

ワシタンナサマの義もく人を親しと敬ひ  
或ハ大切と思ふ人をりか○吾君宇俊俊

あが君の御なめりこそつたなら  
身の命もをけりてとらあま

あがきま

ひくく手をすま  
あしひぬべし

あがぎれ

病名あがりの  
下注す

あがく

あがく

手足をあがく 盛衰 四六  
此事又人あがり給うはそらあま

あがく

あがく

あがく

あがきまを重杯りへりて人をたか  
願ふ詞なり 源紅葉賀 女あがきまくとむ

馬のあがきまをりひ ○ 蹴  
万七足何久敷ぬまをけり

人の手足を「モガク」をりひりひり  
古事談権守あがきまを西枕はたあま

草名は「まき」の下  
注す字 地膚子 阿加

草名あがきまの  
下注す

野邊道旁は生ずる小き蓼紅花  
穂をかきまのたう ○ 野蓼

堀臭きをのりなり 辨内侍日記上あか  
らげなまをてこまこえを

赤ぬり又あか糸あか革を  
ねがたる甲曹なり

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

重色目なり 装雜 赤朽葉  
表經 紅緯 濃黄 裏黄

あかきまを帯たる色なり 雁衣 赤朽葉の薄  
紅は黄をさたる色目なり 弄花抄 赤く

あかきまのつねの色なり  
かたよりたる色なり

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま

あかきま



あかげうま

赤きけのうま 驛よねを  
和驛馬赤毛馬也

あかげひげり

赤色を帯たるひげり  
げの馬なり ○驛驢

あかご

生も程な兒をり ○赤子 狭君の只  
あごのむつねよつまんうらごり

あかご

我子をり ○万九 たまふまきり  
ありりし安我故のあまご

あかこ

溝の中は生ずる細小の紅蟲なり  
金魚の餌に用ゐる ○小紅蟲

あかごけ

苔類なり 湿地に生ず其状泥土に  
似る紫色細き苔なり ○紫衣

あかごげちや

赤とある黒褐色  
なり ○正鐵色

あがらろ

万五 安我已許呂あろーのろろよ ○吾心  
明しとろつを地名の明石よつげたるなり

あかごさいが

本名あかあがいの  
下は注す

あかこなすび

草名のぬほふつきの  
下は注す

あかごめ

蟹属やまがの  
下は注す

あかごま

催馬樂律曲名中古  
以来絶たり ○我駒

あかごま

赤毛の馬なり 万五さつゆをわよきりも  
ちて阿迦胡麻ふさぐらるちわね 又十三 赤

駒のりぬれたるがらるちよきまはらわりの

あかごめ

俗。たろほろー。たろほろー。とほろー。たろほろまの

稻類葉細く短く函わく粒細長く味淡し  
十粒よ九の色赤し故に稱す ○赤私

あかごめ

あまのちりしのかをたろ  
こめなり ○陳廩米

あかご

草名 苗葉花實皆灰藪は同ト只嫩心鮮紅  
なり 植あやし杖は作りのろり 和藜 加佐 阿

あかご

まのちりしのかをたろ ○鶏冠藤川百首た  
久ひの昔の庭もあいらりのあかごかこえて

思ひの

あかさぎ 東京俗 ○きくじ

魚名のしより小似て身扁く鱗色黄紅

あかさくら 俗 ○きくじ

明らつたると暗きとなり

あかさぐれ 俗

大豆の皮紅紫色なるもの ○紫大豆

あかさぎのあつもの

あつものをあつものなり 徒然草紙の 衾麻の衣一鉢のまうけあつものあつもの

あかさぎのつゝ

あつものをあつものなり 散木下 杖のつゝ

あかさぎのほひ

あつものをあつものなり 世のやまも照さば 光あつもの杖のつゝ

あかー

あつものをあつものなり 和名阿加 漆料に用る

あかー

あつものをあつものなり 下注す ○燈燭

あかー ○あかり

あつものをあつものなり あつものをあつものなり

あかーかぬ ネヌヌル

あつものをあつものなり 夜をアカシカネルをり 拾遺 雑下 秋ふつみ

あかー

サシスセ

あかー

夜を明し目をくらむをとりあつものなり 源玉菖 此

唐物語 ふくた山のなるあかー

あかーたま

玉の羨稱なり 垂仁紀 三年春三月新羅王子天日槍来帰焉 將来物 云々赤石玉一箇

あかーたま 俗

玉名、珊瑚の石なり

あかーたま 俗

玉名、珊瑚の石なり

あかーたま 俗

播磨明石より出るあつもの

あかーたま 俗

木名、志でやまぎの一種、紅花のもの、白花より少なり

あかーたま 俗

赤いものあつものを云 枕三牛飼 あつもの

あかーたま 俗

あつものをあつものなり あつものをあつものなり

あかきようま俗

草名、とりあゝあまうまは  
下は注す

あかきらつる俗

赤を帯たつ白つらむと赤なり  
綾殿式赤白  
橡綾一疋、黄檀大九十斤、灰三石、茜大七斤

あかきらつる俗

白橡、赤を帯びたる色目の袍をり  
彈正式凡赤白橡袍、聽參議已上着用

あかすサシスヒ

夜をあらうと云ふ源朝顔  
涙はひらりとあつらふと云ふ

あかすサシスヒ

道なりと云ふ  
記下阿斯布麻須那阿加斯豆杼富禮

あかすサシスヒ

物をアカシテアルを  
たゞし何れはななり○證

あかせケリル

物なり

濱松三つらゝと云ふ申侍ら源御幸そのをうらひさつひがらふも

あゝ侍らす花鳥餘情須磨ゆゝのうらひさつひがらふもあをよびのさうぬきと

いだしゝのちよ衣裳の名をあかせり

あかす俗

木名、あぶらと云ふ  
下は注す

あかす俗

赤黒き淡又赤黄なるもあり玉石をきり  
及び粗磨は用ぬものなり○合玉石

あかす和泉

木名、あぶらと云ふ  
下は注す

あかす俗

朱き色の  
墨なり

あかす音

赤き水精をいふ  
臨時祭式赤水精八枚

あかせ記中阿

男を愛しむ稱なり又兄をいふ  
賀勢能岐美波那美多具麻志母

あかせ鳥名

鳥名、うらと云ふの  
下は注す

あかせ虫名

虫名、あかせと云ふの  
下は注す

あか野苧麻

野苧麻に似て小葉の大き二、三寸、  
莖赤くして葉兩對を苧麻の一種

あか陸前仙臺

草名、あかとの  
下は注す

あか朝

のり田の義まゝ畝をいひ朝  
廷の御上田より轉りて必畝ならねと上古

御料の地を指しつゝり小事な事なり  
後、縣字をあてつゝりよめる異なり

あがた

この付くはひもあがたぬもひもあがたぬの淡海縣のり  
かたうせん土佐ある人あがたの四とせ五とせとせ

あがたあがた

この付くはひもあがたぬもひもあがたぬの淡海縣のり  
かたうせん土佐ある人あがたの四とせ五とせとせ

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

上のあがたより轉じて御領所すたあがたか  
なとりの意よりなり  
カセあをこつとよさ

あがたの語の上は擧げると同トけきと  
轉じて田舎と云意よりなり  
井ナカアルキの

菜名あがたあがたの  
下は注す

性輕淡く味美なら  
さる稲なり○私

瓜名あがたあがたの  
下は注す

菌類あがたあがたの  
下は注す

あかぬりの痛なり  
崇神紀赤官八枚

あかぬりの痛なり  
崇神紀赤官八枚

あかぬりの痛なり  
崇神紀赤官八枚

あかぬりの痛なり  
崇神紀赤官八枚

あかぬりの痛なり  
崇神紀赤官八枚

あかたあがた

あかたあがた

あかたあがた

皆世職なり記中亦定賜國々之塚及大縣小縣之  
縣主也神武紀給弟猾猛田邑因為猛田縣主

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あがたあがた

あか

莖葉花實皆赤し葉の長さ二三寸  
播磨小産也○赤蓼

佛小供する開加の器を取あつゝふ棚なり  
方丈記其西小あがたあがたを作り

上代小朝廷の御料地の諸國小在る者と  
縣とひひを掌する者を縣主とひひ

上小同後小姓となさるなり  
紀縣主多朝臣同祖神八井耳命之後也

魚名あがたあがたの秋小至て身小  
神代紀下赤女即赤鯿也

紅色をねあがたあがたの○紅連  
赤き玉なり記上阿加陀麻のをえひひれと

玉類なり紅黄なりその黄白なるもの黄  
黒なるもの數品有り松脂の化し石質

あがたあがた



あがたしむる

ハムルハレ

同上

あかつき

あかりはれ  
物のな

神皇正統記下 大上中下の四の功をたてて 田をあがらたすハ 蜻中 2771  
あがたしむる 又 あがたせむる  
明時の意は夜のおけがをのハ 古今意  
有明のつぎはくええ 2772

あかつき

音水のけりひ  
なと聞ゆる

あつと佛は供さる器 源鈴虫 2773  
たち二三人花奉る 2774

あかつきね

君よわらさせど 續千載 夏  
此つともあつねを袖を涼

夜の明がさる早起さるなり 和泉式部日記  
よひごころ返しをれをいづも 猶曉あつね  
あつねを涼

あかつきがた

あつねをいひ 古今 夏 月のおりろかり  
ける夜 曉がさるよめ 拾遺意 2775  
なつねはけさる 又 葵念佛の曉がさる 忍びがた 源若紫 曉がさる

あかつきげ

つぎの赤き馬なり  
和 赭黄馬赤鶴毛也

あかつきごと

おくらへ 續古雜中  
なつねをいひ 鳥のなつね

あかつき

あかつき 下の注す

あかつきつよ

ぶらね 曉月夜のとも  
いはず 霧のとも

あかつきつゆ

くなら 千載 秋上  
なつねをいひ 花ぞあつね

あかつきのまはぶね

あかつきや

あか

○廿

吾景卷一

玉の曉やふらふられよ何を  
あつぬと鳥の鳴らん

あかつく カキケケ

垢のつく又ヨゴレル  
をよめいぬ

あかつける ラリルレ

あつあつとよぶま  
たふをゆふ

方十五のもろころもの阿可都  
けり玉造小町子壯衰書 垢職之  
衣裏容何物慶節骸垢ヅカ

あかつち

赤黒まてつちまの如き  
石なり本和代楮加都阿

あかつち 俗

黄赤色の粘る土なり  
はよの下に注す

あかつち 俗

あつた顔を  
いふ

あかつち 俗

鳥名つぐの一種  
頬赤きめのなり

あかつち 俗

夜のあつたをいふ 方十二五更のめがま  
つたをいふ 方十一安可登吉まのりあつたを  
いふ 方十阿加等伎乃加波多例等キあま

あつたをいふ 又十六安可登吉まのりあつたを  
いふ 方九阿加等伎乃加波多例等キあま

あかつち 俗

夜のあつたをいふ 方七あつたの  
り 方六阿加等伎乃加波多例等キあま

あかつち 俗

鳥名あつちの  
下に注す

あかつち 俗

夜のあつたをいふ 方五あつたの  
り 方四阿加等伎乃加波多例等キあま

あかつち 俗

夜のあつたをいふ 方三あつたの  
り 方二阿加等伎乃加波多例等キあま

あかつち 俗

夜のあつたをいふ 方一あつたの  
り 方一阿加等伎乃加波多例等キあま

あかつち 俗

夜のあつたをいふ 方一あつたの  
り 方一阿加等伎乃加波多例等キあま

あかつち 俗

赤を帯たる鳥  
色なり ○ 醬色

あかつち 俗

虫名あつちの  
下に注す

あかつち 俗

船の中の水をいひ出さ器にて  
あつちの水の梵語なり ○ 犀斗

あかつち 俗

あかたな俗。あかうらら。あふぎな。油菜に似て紫色、根も紫赤色。近江日野に産す。○紫菘

あかたな俗。あふぎな。ひのな。菜名、さへんじゆゆ。ちの下に注す

あがなひ俗。あがなひの體言なり。○贖

あがなふ俗。ハロフヘ。物を出して罪科をつくのふなり。あがなふおなほ。和玉篇贖ハガ

あがなひす俗。セスルスレ。他をくアガナハセルを

あがなひも俗。ムカハレ。同上

あがなへ俗。ラリルレ。あがなひてあをを

あかたな俗。あかたなを。あかたなをくつを

あかたま俗。あかたまのいろあかたのをいふ

あかたま俗。あかたな。黄類魚の類、長さ二三寸、鱗に刺あり、人を螫す

あかふこ俗。ぎょう。魚名、ぎょうの下に注す

あかふ俗。螺属、あさきの下に注す

あかめ俗。各番人をいふ

あかめのほ俗。顔のあかむをいふなり。祝詞式、月次祭、長御食乃遠御食登赤丹穂、聞食

あかぬけ俗。垢のぬき、清潔なる義なり。人の顔色をいふ

あかぬ俗。人を尊と親とをいふ詞なり。万五阿我農斯のまを給ひて春さくらば奈良の都に

あかぬま俗。草名、下野赤沼に産す、葉狭きもの、溪蓀の一種

あか糸俗。あか糸ぐら。あか糸。蔓草なり、四葉一節、生ト、莖葉ともよ細刺あり、此草の根を染料に用ゐて赤

色を染む。本和苗根、和名阿加糸。雑物、大宰府、苗二千斤。民部式、下交易



あか糸い俗

魚名あらかわまづの  
下は注す

あか糸くづら俗

草名あか糸の  
下は注す

あか糸さす枕詞

万二あか糸さすと紫又ニあかねさす日又十三  
あか糸さすとひる又十六あかねさすと君〇赤さ

氣の刺す義にて明らかうよう  
一と意にも用ゆるなり

あか糸ぞめ俗

茜根にて染たる  
めのなり

あか糸ぢり丹後俗

木名まつでやなぎの  
下は注す

あか糸ぶり俗

温室の蟲人の垢を  
舐るより名づ

あか糸ぶり俗

虫名あめりの  
下は注す

あか糸もめん俗

茜根にて染たる  
木綿なり

あか糸り

赤絹の糸りたるをいふ  
彈正式赤練

あかのかわ俗

あづきぐの  
下は注す

あかのき俗

木名めひくらぎの  
下は注す  
闕伽を佛は供する器源鈴虫あかの  
具の例のきいやうよりひさうて

あかのぐ音

あかねあの下は注す源鈴虫あかねあど  
してそのこもたまき給へる御まづひるど

あかのねな

赤の乾浄の義めて親屬  
わらうざる人をいふ

あかのためん俗

闕伽ふとて供する花をいふ源如あの花  
の夕たえそいとわめしうく見あまが

あかのほね

魚名たひまの  
下は注す

あかのぶす俗

あかのめりの  
下は注す

あかのまんま俗

蓼の花を  
いふ

あかのまんま俗

闕伽の水の梵語なまもとも重なりか  
もりへり新六三あまねくあかのまんま

あかのまんま俗

〇廿三

あかほつとつとらけのねもとい  
あかほつとつとらけ

あかのあ〜俗。あぐれめ  
あこのましま

あかのを〜あちち〜何よあ〜まの  
玉〜ま〜

あかぼうず俗

あかぼうえ俗

あかはたを捧げ  
たり

あかはだ。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

小豆を交て炊  
たる飯なり

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

あくを佛に供する時物をのせなく折敷  
なり山家下ま〜〜わ〜あ〜の〜〜ま〜

上小同ト七十一番職人歌合い〜〜の〜  
はう時を〜む〜あ〜も澄る月哉

大麥の歯なりのの  
なり〇裸交

實劔の名なり毒仁紀作劔一千只因名  
其劔謂川上部亦名曰裸伴潘伴此等母阿蔵

明耻て耻辱のあらり  
たるをり

黄赤色の翅て腰細く身は黒と  
黄赤の斑ある蜂なり〇釋蜂

青頭菌の赤色をおぶるもの常品  
先立て出るものなり

祭事は用ゆる潔清の服をり  
大嘗祭式明衣料絶二疋

鼻のあ〜た〜り源未摘花手づら此あか  
ら〜を〜か〜ろ〜け〜あ〜ら〜〜〜見〜た〜ま〜

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あかほつとつとらけのねもとい  
あかほつとつとらけ

あかのあ〜俗。あぐれめ  
あこのましま

あかのを〜あちち〜何よあ〜まの  
玉〜ま〜

あかぼうず俗

あかぼうえ俗

あかはたを捧げ  
たり

あかはだ。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかはた。あかただ  
を捧げ  
たり

あかばね俗

花、四瓣紅花を開く大さ二分餘○柳葉菜

あかばね俗

紀國ニ産する大魚なり

あかばね

赤色の淡く、梢紫を帯たる色なり胡曹樺櫻表赤花

あかばね俗

對馬俗

○あつめ、まろすこ、身、扁く短く頭大鱗あら

く、全身赤色淡青の筋數條あり○黄穢魚

あかばね俗

マシムシ

赤色のつらつら

あかばね俗

ヲリノ

あかばね俗

物の赤色のつらつらあるをのりなり宇藏開中あつめたるをさす、かきそりなり

あかばね俗

鳥名、状つらつら似て頭黒く背翅蒼灰胸腹赤

下ニ注す

あかばね俗

魚名のぐひの

下ニ注す

あかばね俗

あつめたる腹まねのようひをらる増鏡大納言いからのかう赤のうまもの

かり衣よわくねよらちを

あかひいな俗

草名のぬびもの下ニ注す

あかひき俗

蟾蜍の赤を帯たるもの、又讚岐石清尾の赤色の種ありとらふ、此との異なり、

あかひき俗

虫名、あかひきの下ニ注す

あかひきのと

あかひきのあつらひくたるとあつらひく同く光りありとらふ、き絲をり神祇令義解

謂神服部等齋戒潔清以參河赤引神調糸織作神衣

あかひげ

鬚のあつらひり今昔長とらふやうして少く赤鬚なるありなり

あかひげ俗

鳥名、状つらつら似て頭背赤く咽黒胸白腹も白

あかひすね 俗

鳥名とぐとひとりの  
下の注也

あかびそ 俗。むらさきひめ

苧の一種莖葉紫色、紫蘇の  
如き者なり。○紫苧

あかびろ

清浄なるひつとて神事を用  
ゆるなり。四時祭式。明櫃

あかひとこ 俗。ぶよひとこ

介名ひとこの  
下は注す

あかひも

小忌衣よつとる紐なり。縦殿式。緋紐料、  
貫布一端三丈三尺七寸、

あかひやう 俗

注次よ  
見也

あかひぬ 俗。あかひやう  
。あやうえんド

莖葉紫赤色の苧なり、古へ赤色の具を用  
ゆるもの、今も生黧脂の名あり、和赤苧  
白晝なり。落窪。何なるかりの君方のまへ  
かく我家をあらはしむるよ入立さく

あかひる

あがらうと同語よて罪なりと

あがふ ハヒフヘ

つくのふをりよ。贖  
他をよて罪なりとあがらふ

あがらふ セスルスレ

まをりよ

あがらむ ソムルムレ

同上

方十七 安賀布伊能知毛續世繼六  
けもい 發心集ニ したくまぐきみの返さぬを前よよびよせし物程よ  
隨て念佛を申させんと  
あがらむ

あかぶ 俗。あがらむ

剪秋羅一種毎節黒きもの  
ありて山野自生あり

あかふのたろ

鷹の赤斑あるものをいふ。定家卿鷹三百首  
我戀ハ赤符のたろのかぐへり取らるる

あかべ 俗

木名あがめがしほの  
下は注す

あかべ 俗

木名あがめがしほの  
下は注す

あかべ 山城俗

木名あがめがしほの  
下は注す

あかほ

あがらふの和名なり  
崇神紀。赤矛八竿

あかほ 俗。あけのきやうあやう

他星よりあがらふか。名く故よ  
かぐらひ。和明星。和名阿保之



よりぬあめてあうて 枕ニうひひら大きき

あかむ

あかめ

あかむ

あかむ

一黒條

あかん

あかん

あかん

あかむ

草木の實のアカルムを

皇極紀 熟榴見

虫名ありすけの

むりの籬赤きもの、二三寸より八九寸に至る、色淡黄褐脇

あかむの下

下眼脛を指して引廣げ、小兒を嚇す語を、轉して又事を肯ハするをいふ、盗之物又贖銅、職員令贖司、みづから顔を、あかむ

あがめ

あがめ

あがめ

あがむ

あがめ

あがめ

あがめ

あがめ

源 昶本 親を立とひもてあがめ、又明石、奉りてめてか、

あがむ

靈異 贖 女阿如

あかめ

魚名たひの下  
注記上赤女

あかめ 俗

魚名めねだの  
下注す

あかめ 安房 俗

魚名あかめなこさひの  
下注す

あかめ 能登 俗

木名あかねらの  
下注す

あかめうづく

カキクケ

物をタイセツニスルをいふなり 源東屋

侍り

あかめぐも 俗

あかめぐも。あかね。あかべ。あうさぎの。あうかり。かぞ  
こまやば。かひを。かむら。かば。かむらか

あかめ 俗

葉三尖より大き三四寸より  
五六寸に至る嫩葉紅色夏月黄

白花簇り開き子を結ぶあかめの  
條併せ見るべし

魚名めねだに似て目口大なり  
小魚全身紅色緑色の點あり

あかめだひ 俗

あかめだひ。うまぬまびと  
あかめだひ

あかめのき

能登 俗

木名あかねらの  
下注す

あかめあぐ 俗

あかめあぐ。あかめあぐ

河豚一種、目赤く背は雲の如き  
青黒紋あり、秋多し毒最も甚ぶ

あかめ 俗

あかめまづ

リリルレ

タイセツニスル意なり 今昔此國よ  
從上古崇り祭る神在

あかめあぐ 俗

あかめあぐ

あかめあぐやまみなり 神代紀下乃  
知是天神之孫益加崇敬

あかめ

あかめの腰裳をいふ 万六  
あかめは赤裳をいふ

あかめあぐ

あかめあぐ

麻疹のこちわりあかめあぐこの條併せ  
日本紀略赤疱瘡榮峯の目かくりあぐ

あかめ 俗

あかもつ俗

魚名あつむつの  
下は注す

あがもの

已まらざ罪を贖ふ代物の義にて稔の時小物を出さるり公事根源御贖物

あからか

顔色のうらみあからかをいふなり○暁雄略紀諸好備矣暁矣温矣

あからひき

赤き状をいふなり記中波都迹波波陀阿可良氣美志波迹波迹見漏岐由惠

あからひき俗

カリソニツイチヨットなる意本いふなり○意まて今俗よりのいふ意異なり神武紀倏忽

雄略紀暴宇忠乞

でぬ狭二火桶は火ちどおと

あからひき俗

物をもちあはせてつむ事たのむをいふアカルキサマの意なるべし

あからひき俗

俄に死するをいふなり神代紀上天折○あ

あからひき俗

めらさるるをいふツイチヨットをいふ意あり

あからひき俗

ネゴロナルサマをいふ靈異中狼シキ

あからひき俗

ネゴロニスルをいふ○怨靈異下怨安比良

うねいふいふその徴を  
見らぬねいふは擧げを

あからひき枕詞

方四赤羅引日もつ又十二朱引朝

朱羅引赤きたへのを○赤き氣の引く義にて餘光ありてうらみ

十なる女をわめて  
いふあり

あからひき俗

顔色の清くうらみあからひきをいふなり○祝詞式神壽詞 赤玉能御阿加良毗坐

あからひき俗

あらの明あからひきをいふなり○意同ト○昭察

賜止敷賜比  
大坐坐止

あからひき俗

稲わらのものをいふなり○皇極紀九穀登熟天智紀熟

あからひき俗

稲わらのものをいふなり○皇極紀熟稻見

吾景卷一

あか



あからめ

傍へ眼を著るをりふヨソなり ○賣眼  
宇蔵閣中 御あまもまきりまうあからめ  
大和物ウレあまひのち 男ならんあか  
あからめさす サシスセ  
あからめハワキヲスルガのちあひひげむ  
俄ちるをりふあうつハ 神武紀 小倭忽まこ

雄略紀

暴

あからめとある何からありめさすの目をさす物と云ふ物を見くちるをどあこわす之めさうつまがごとく俄小のの轉るるを

景行紀 何禍ヲ何罪ヲ不意之間倭亡我子 續紀廿五 今曰か  
有牟明日加有止所念食 轉待此 賜間ハ安加良米佐須如事也

あからめする

セシスル

上は同トクワキノラスルガめこく轉ト

あからめせむる

セシスル

他をワキノラサセルをりふ又心を外へうまきるをりふなり

あからめせむる

セシスル

同上

あからめせむる

セシスル

我が物のづらワキノセラレルをりふ又心を外へうまきるをりふなり

祭花山 ころたらの君いらづまあからめせむるをりふなり 敬語なり

あからをとめ

佐婆余良 斯那

ウツクシイムスノあうらいつくしきをりふ  
○紅顔嬢子記中 阿迦良袁登賣袁伊那佐

あからをぶね

あかり

赤く塗る船なり 万十六 奥のくや赤羅小船  
みつこゆらげじ人こひさき見んうも  
日月燈なるの  
光りなり

あかり

あわすのの  
下は注を

あかり (俗)

證の下は  
注す

あがりうま

あがりたり (俗) のがらうま

あかりがたろ (俗)

あがりかひこ (俗) 〇あがりこ

たぬ馬をりふなり 續世繼七 あがりうまの  
のせうまぬまぶせませたり  
階まの山坂たうど上下  
まらをりふなり  
疑ふまらここの  
明白なうあり  
かひこの死さる  
りふ 〇殭蚕

あがりうま

川口

のよのりてあがり  
うまひさなり

馬のよのりてうまを云○驤狂五代帝王物語  
園少將基顯の扇を折て脊よきうまをせ

あがりこ

俗

蟹属やまかまの  
下は注す

あがりこ

俗

あがりかひこま  
同ト

あがりさだ

俗

光明の前  
なり

あがりざり

俗

罪ある人をねらふ  
たぐく處なり

あがりさる

俗

加キクケ

馬のよのりてさるを云○驤枕馬のあがり  
りさるがたなりあがり

あがりさる

俗

あがり音

障子のよのりてさるの具あがりさる  
し紙をひいて張てあがり故よりなり

あがりだん

俗

今俗いれたるあがりトとのりふ  
今昔三三三

宮殿たのり登る  
階級なり

あがりたるよ

上代の義より遠きむらを云あり  
源若菜下  
雲いなりをさるがたなり

あがり

あがりてのひと

上古の人をいふ  
源若菜下  
るやあがりたるの  
人よりあがりたるを云

あがりてのよ

上のあがりたるよをいふ  
大鏡七  
あがり  
てのよよりかく大臣公卿七八人二三月のうま

あがりてのよ  
あがりてのよをいふ  
源若菜下  
るやあがりたるの  
人よりあがりたるを云

あがりて

川口

あがりてのよをいふ  
神代紀下  
且口尻  
明耀眼如ハ咫鏡而絶然似赤酸醬也

あがりて

俗

次のあがりまど  
同ト

あがりまど

俗

明りをとる窓なり  
○仰窓

あがりまど

俗

葉細長ありて花りんごの如し其  
表裏とも深紅奈の一種なり

あがりまど

俗

前は擧げたるあがりまどは同ト上等の  
アガリザシキ下等ハアガリヤあがりなり

あがりや俗

没官ふたりたる

あかるレリルレ

アカクナルをりふあり ○明枕二 二をりふあり 曙

りて紫だちたる雲のやま

あかるレリルレ

酒などの顔のアカクナルをりふあり

あかるレリルレ

○配祝詞式大嘗祭豊明座年 清く二 二をりふあり ○明推古紀明

あかるレリルレ

器明衣祝詞式春日祭 明多閑照多閑

あがるレリルレ

あ二 二をりふあり ○熟

上二 二をりふあり 又飛揚るをりふあり 万サ安我

流比波安利源若菜下 雲をりふあり 又桐壺二 二をりふあり 又薄雲権中納言大納

あがるレリルレ

物價のタカクナルをりふあり

續紀三 天下穀價騰貴百姓飢急

あがるレリルレ

馬なると糸あがるをりふあり ○驥雄略紀龍驥虎視 ○上揚貴驥共 二をりふあり 意の少

しろうりたる

あがるレリルレ

深あがるのあがりは色のよくあがるをりふあり

あがりける戀の

あがる俗

魚の死まるをりふあり

あがる俗

物を爲し終りたるをりふあり シアガル出来アガル

あがる二 二をりふあり

あ二 二をりふあり 宇拾古 火をりふあり

あちのまわりてえええええええ

あかるた二 二をりふあり

あ二 二をりふあり 明の意をりふあり 美稱なりたる 絹布

あかる俗

あ二 二をりふあり 方なり

あがる

あつまりたる物のかまぐへはさうもゆくこと  
りふ **天武紀** 悉散走又入陣衆亂而散走之  
不可禁 **紫式部日記** たちあがれやまむ **源帚木** あまうれやかりあがらるること  
ろよて **宇俊薩** のくらめ奉らんよあそりすまもいひを奉らんと申すまは  
のこまたびてまみ十人廿人とあがまをよ人の道をめくらめ奉る **又吹上** むじ  
所々あがまをきききんの残りやどりのり風といひしを

あがま

別もくはなるといふ **大鏡** **五** 太政大臣為光  
をのこ君達の御母あがまをくよあそりすま  
あつまりたる人のくまぐへはさうれたるを云  
たり **源宿末** かぐへつとひのせられける

あがま

あつまりたる人のかまぐへはさうれたるを云  
たり **源澤標** しとまびくくくろをたんと

あがま

あつまりたる人のかまぐへはさうれたるを云  
たり **源澤標** しとまびくくくろをたんと

あがる

草名 あららの  
下は注す  
赤き **并** 井ノシ、をり  
**記上** 赤猪在此山

あがる

佛は供する水を汲む井なり **拾玉** 諸とも小佐  
らん物を年とへて向ふあらの水の心を  
佛は供する井の  
菜名 くららまめの  
下は注す

あがる

状態の蜻蛉より小なり身と翅とともふ  
朱色なると身朱翅褐色なると二種あり

あがる

水母の一種 状傘の如く  
あつて細長き紐多し  
魚名 赤らもの 轉音其状頭大口潤く眼も  
大なり尾は岐なり細鱗全身赤し  
あらの水を汲む  
のり桶なり

あがる

あつまりたる人のかまぐへはさうれたるを云  
たり **源宿末** かぐへつとひのせられける

あがる

苗高は二三尺一根数莖 初出の芽白  
毛多し葉形楕円し厚硬し色深緑  
邊細刺あり三葉或は五葉 秋月枝頂花を開く  
形薺ふ似たり 白色は多く紅色は少し **○蒼木**

あかそだひ

越中俗ひまのそ  
ころろを

あき

けふ花よかどくして  
こまやくりうも

あき

あき俗ひまのそ  
ころろを

あぎ

あぎ俗あぎと

あぎ

あぎ俗

あきあぎ俗  
○阿魏僧尼令五辛云々五曰興渠也翻名什物篇興渠云々此方相傳為芸  
臺者非也此是樹汁似桃膠西國取之以置食中今阿魏是也

秋熟まる小豆なり  
○秋赤豆

物を賣買する義にてあきなりひの  
あきなり類名商字

状さくろふ似く長く外面の角刺なり  
其肉純赤なり本和大辛螺肉阿岐名

口の上下の邊をいふ  
和勝阿岐名

あきあぎ俗の下に注す記中伊奢阿藝  
布流玖麻賀又佐邪岐阿藝

古書云ハ樹の脂なり方今舶来する者ハ  
巴斯は産する自止は似たる草の脂なり

秋の著る裕衣なり新六五賤の女がきりぬ  
衣の秋ありせをやくもりそぐつちの音うな  
虫名あきんの  
下は注す

あきあき

あきいせ俗

あきいし俗

あきうら

あきか枕詞

あきかせ

あきかせ枕詞

あきか

あきか

於是娘子怨恨聊作斯歌獻上高變あらまの  
御法あきか下衣うらたあきか

あきびしあきうら音便源玉葛あき  
し市女あきうらの中

万士桐梅潤和川過の〇高梅賣とりふ意  
のつらなり秋も潤も借字なり

秋の時節は吹風なり万十五安伎可是ひひ  
けふ吹ぬとぬるのりつと我をりひひらん

万士あけ風の千江の浦町の〇風をひひ  
るめらちとちとら秋風のちとつらなり

イヤあきありあきをあき伊深草小住

買とりたるりの心をあきとて返さあり万十六  
時有所幸娘子也寵薄之後還賜寄物俗云可

あきつゝの (枕詞)

つゆ  
たり

あきざつり

あきつゝ

あきつゝの (枕詞)

あきつゝの (枕詞)

あきつゝの (枕詞)

の佛事の時云々あきつゝの  
花を北のまきふりあきつゝ

あきつゝ

花葉をうぐいすより小く狭く葉面緑背白く光る  
實赤くして白点あり秋熟も○木半夏一種

仁賢紀 秋蕊之轉雙納可思惟矣○蕊の子  
の二介づつ皮ごりりて實もまもりて雙納ふ

秋の霧をり古今秋上 春霞かきこくしりあ  
かりけぬい今ぞ鳴るる秋ざりの上よ

まぐさの秋の草をりあ 夫十四 さえぬらん色ふ  
出ゆ秋草のまわあきつゝもあひ心い

万八 秋草のむまびひをを○今案ふ古へ  
草を結びひひのこまわれあきつゝもあひ

秋のりあきつゝの義あきつゝあきつゝ  
菊の異名塵漆壘囊抄ニ又菊の訓もあきつゝ

東福開山聖一國師重陽  
くさのまもりあきつゝ

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

山の際に渡る秋沙の行そぬん  
その河の瀬に浪立ちぬぬめ

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

あきつゝ (俗)

むかぐさの  
下注さ

状さぐさふ似る頭背灰色腹白背脚並赤  
カ鷲の類ありを異なり品類多くあり 万七

草名あきつゝの下注さ

家の内小人の住ぬ

アキナヒンテツケヲスルとのあ

字 彈 佐須

秋の時分と云んが如く 玉葉雜 龜山院か  
らまきつゝ給ひくつきの年秋さきより

秋の時節よある雨をり 八雲 光忠うあは  
さあけりとのるなぐひんをり した事なり

秋ふなりてきる衣服なり 万十 たあきつゝの  
しあきつゝた織布の秋去衣たき取しん

秋去者りし見ると妻さひは鹿をり 万一  
秋去者りし見ると妻さひは鹿をり

やまもと高野原の上又十五秋佐良渡又十六秋避而

あきつゆくのみまな

あきつゆひ

あきつゆひ

あきつゆひ

あきつゆひ

あきつゆひ

あきつゆひ

あきたれ

あきたれ

菊の異名蔵玉集あきつゆくのみまな草葉も枯るまて野は残りあきつゆくの花

見エサウあきつゆく見えぬ眼を

和清言阿比

萩の異名蔵玉集あきつゆくを根知草の

風よりや老の袂のまうらふをさるらん

ぬいもれ城をりふ

秋の田なり万十秋田河借盧をつらりしをまて衣手さむく露あまらよけ

ヨシニシタイとのふ意なり源帚木ようせ

秋の天

わたり

あきつゆく

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきたれ

あきつらね

あやしく物心細く  
思ふ給へらるる

あきつるか

天皇をきく申奉るなりあきつる現  
在の義今の現世は神あてまき意なり

あきつこ

又十八 秋豆氣婆志まもの  
あめあり

あきつこ

あきつこ

都志たひひふよりあめつら大名ふあまをわり此室の地は都志たひひて  
秋津嶋宮とらるるまの神武紀此たりて國見まひひく蜻蛉の  
形小似たるよりのまひひより此名出来たるなり  
万二 師 怜 國 曾 蜻 島 八 間 跡 能 國 者

あきつものそで

わくまのあきつ  
みらま

うまの袖なり蜻蛉の羽は似たり  
ゆふ 万三 秋津羽之袖なる妹をたまひ

あきつね

アキツバヤイの  
義なり

あきつね

を給らるるあきつねよとら  
かきつね

あきつね

虫名あきつねの下注  
藻土蜻蛉秋つむ

あきつ

あきつ下注  
類名 題

あきつ

魚類あり 和 鯉 阿木  
魚類也

あきつ

小児のあきつめを云ふなり  
記中 爲阿藝登比類名 嬰孩

あきつ

魚の水上市浮て水を吞状なり 神武紀  
魚浮出唼喝 蜻三 ころの人のあきつ



やうふまきねが

類名 照り葉

あきさなむら

殘蕊の異名 蔵玉集 花ちりて其名むらり  
小秋無草かこふおたる今朝の露玉

あぎなむら

筑前俗

○あぎなむら

全體慈姑の如く葉潤き三四分  
長さ一尺許、花も又小き初出

の葉ハ岐ま〜して竹葉の長きが  
如く慈姑の一種なり

あきさな

中國九州俗

草名あぎさの  
下ふ注き

あきさなひ

あきさなひの體言物を賣買するなり ○高  
竹のつとわらばあきさなひなり

あきさなひむら

俗

正月高ひを  
始むるを云

あきさなひぶね

俗

高ひよ往来  
する船を云

あきさなひもの

高ひまら品物をいふ 爲頼集 市ひめの神  
のりさねのりやあきさなひものふ千代

をつむ  
らん

あきさなふ

ハヒケ

物をうりかひするをいふ ○高 宇藤原君の  
をた〜と〜のあきさなふをいふ

からめ 天和からむりのあきさなひ  
いふあ〜といひて泣くれば 類名 市

あきさな

俗

○あきさな

葉形楷ゆ〜て尖り、邊ハ鋸齒  
あり、八月小花を開く、黄白色

莢を結ぶ  
○榔榆

あきの

あきの

あきのあぢ

秋の野をいふ 方サ 秘野 今こそあぢ  
の〜あぢをいふことをいふ花よあぢ

して人のね〜らるたあぢこの  
秋の扇の名をいふ

あきのいろ

秋のけ〜れをいふ 拾遺愚草 上 さえ上る  
月の光よ〜して秋の色なるわ〜合の空

あきのさね

秋の終りなり 拾玉 世々を〜法のみ  
ろをてらさな 秋の限と秋のよは月

あきのさ

冬ふなりと秋のお〜の〜と〜その  
け〜の〜なり 拾遺 秋 暮て行く

秋のたゞしき置物の我りめひの  
霜うつとありけり

あきのさくらんさう

○きんくさ  
○あきなちさう

苗の高き二尺葉雞兒腸ふ  
似て色深し、莖紫黒、秋の末

小黄花枝ふ満て長穂を  
かうま ○劉寄奴

あきのけりた

あきののろろあなト 氣色ハ字音ながら  
一ツの詞とたままるなり 玉葉秋上  
まのめのとら  
續後秋上 かなあつ過

あきのころろ

あきの物まびた心を云千載秋下  
りけりけりてと秋の心を愁とひひれ  
秋を心ある物の如くりふわり 後撰秋中  
風お深きたのものとむあ

あきのころも

拾遺愚草中 龍田姫くめのととふかたをわら  
あきのころもあきのころもあきのころも  
あきのころもあきのころもあきのころも  
あきのころもあきのころもあきのころも

あきのころも

聲をつぶ  
らん

あきのころも

けつあのみまね秋のまわりふ  
たりやあま

あきのまぶさ

らん人のころもをあねまふ秋の  
まぶさこ身どふりふける

あきのまぶさ

あきのまぶさ

あきのまぶさ  
よらや今霄さの秋の  
調の聲の限りを

あきのせろ

秋の時を  
りかわり

あきののぢもく ぢゆく ①

古への春行もる中古より秋行もるより  
かくりふ此の京師るる官人のを任せらる  
なり 公事根源 是の三月三日より先小おとあへるべに事なまこと今秋の除  
目とをりあまる冬あも及ぶたまり云々つるさめといこの秋の除目を申あり  
つゆりのつもあまきと秋のつりと露とあが  
故ふかくりふ **万八秋露** いろく かりけつ

水鳥の青羽の山の  
色づ〜こさづい

あきののつゆ

秋の復と冬との間ふあまきと冬より復よ  
りもとありとのふなり **續千載冬垣根** あり  
草も人目も霜ぐまぬあまきのつありや遠ざかると **拾遺愚草下** かりせし  
玉江の蘆ふもがくまてあまきのつありの風ぞま〜た  
秋のつ〜たあひ〜ふうりゆた〜るそのと  
まりをりふなり **新拾遺冬** 落つるるめ〜ぢ

をを見ま〜とせの秋のとまりの  
あ〜るなりけり

あきののながよ

四時の中ふ秋の夜長とりひなり〜り **万十**  
とび人のあま心とあふなりん秋の長夜を  
りゆ〜き  
あ〜ん

あきののながよのな

万葉集のう〜より出〜後世これを賞ま  
八雲御抄此名初て見ゆ **万八秋の野** とき  
たる花を指折かたうをふも七樹の花又葉が花を花〜るをなあ〜と  
の花を〜る〜、又あ〜る〜、朝がりの花此歌の旋頭歌なり

あきののぢ

あは野お同ト **万十五** 秋野をわを〜る  
さ〜と〜も〜る〜たびあ〜あまき  
葉苦菜の如く莖長大四五尺不至  
秋黄花を開く **○山苘** 昔

あきののら

あは野お同ト **古今秋上** 里へあまきて人のあり  
あ〜や〜と〜ま〜庭も籬も秋ののらなる  
菊の異名なり **藻ハ** あまき菊の  
花なりと古き物あり

あきののな

辛螺の籬なり香を合まると用わ〜  
の條併せ見るべ〜 **本和** 甲香 和名阿岐  
乃布多  
皇后の御所をりふ **月清上雲** のう〜遥照  
も月影を秋の宮あ〜見るを〜

あきののみや

榮御著裳 **あは** のよふあまきの  
月の光りをも〜く〜  
あ〜

あきこのもふぐさ

秋の日々まがきとりのふ 散木三 鷓鴣鳴真野の入  
江の浦風小尾花をよるよる秋の夕ぐさ

あきこのもふぐ

上小同ト 万サ とせとがやとたふるまきこの  
花きりん安伎乃由布蔽波日ねをふねをせ

あきのよ

秋の夜なり 万八 今造る久迹の京小秋の夜  
の長きふ獨ぬるるるさ

あきこのは

胡枝子なり 万二 吾妹兒おらひつゝあらまの  
萩芽の咲く散ぬる花なりすま

あきこのはの

万十 萩芽之ふらひは有ん妹が姿を○萩  
換のふやうなるを妹の姿小壁言ておけり

あきこのら

まきなる ハテルあき秋のらま  
まきなる ○秋盡

あきこのら

飽ハテルをのふ千載雜下 ぬ ぬ山田  
のひつちつちつちつちつちつちつ世ふあ

あきこのら

商人なり古今序ふんやのやまひでんこと  
ハ巧く其様身おおももものともあれた人の

あきこのら

はたきぬきぬきぬ  
らんが如し

あきこのら

高忠間書むらむの事、中老宿老ふらふてん、  
秋ふらげの黒き皮を用べし、

あきこのら

鹿の毛夏の赤く、秋の黒きあり冬の赤き  
矢の故秋毛冬毛を兼なるを秋二毛といふ

あきこのら

人の住ぬ  
部屋なり

あきこのら

草名、あなめのもの  
下小住ま

あきこのら

草名、めひのいの  
下小住ま

あきこのら

草名、きふねぎくの  
下小住ま

あきこのら

草名、きりねのびんぎらの  
下小住ま

あきこのら

秋熟まる大豆なり  
○報秋豆

あきこのら

こころ十分ナルをりふなり 今昔四 官司  
巫恣お取り心お住せて万小飽満ぬ玉佐此

長櫃のののの皆人きりひまをふらまきりねがあなま  
ふらまきりねがあなまきりねがあなま

あきむし

秋の虫なり 新万下 秋の野小玉とかくもる白露の鳴秋虫のなきささるけり

あきんど (俗)

あきむしひぶねね 音便なり

あきんどぶね (俗)

あきむしひぶねね 旅商人を留る

あきんどやど (俗)

あきむしひぶねね 旅商人を留る

あきめくし (俗)

あきむしひぶねね 下小注を

あきめい (俗)

あきむしひぶねね 秋熟まる

あきや (俗) みたらく

あきむしひぶねね 人の住ぬ

あきやう

あきむしひぶねね 膠の下小注を 綾小路俊量卿記 五節間 郢曲 事云云 びんたらしを あめさせ

あきやう (俗)

あきむしひぶねね 人の住ぬやう

あきやま

あきむしひぶねね 秋の山なり 万二 秋山の木葉をさそふ云々

あきやまの (枕詞)

あきむしひぶねね 万三 秋山の紅葉なる 秋山の色の赤

葉ふ丹穂へるが赤根を朝の天の如くなるを あきやまの 紅葉なる 秋山の色の赤

あきくらか

あきむしひぶねね ハツキリ かりらうの形状を云 辭なり 〇明

あきくらか (カシキ)

あきむしひぶねね 允恭紀 天皇分明 欲知其状 類名 晶なり 分明

あきくらか (拾遺九 萬代をあきらむる見ん) 〇

あきくらか (セマスル)

あきむしひぶねね 自ら物事を昭す 知るなり 〇昭察

あきくらか (セマスル)

あきむしひぶねね 他を昭す 知るなり

あきくらか (セマスル)

あきむしひぶねね 同上

あきくらか (セマスル)

あきむしひぶねね 我があつらひを昭す 知るなり

〔方十七〕 秋の花—ちのりくよ見—たまひ明<sub>ミ</sub>米多麻<sub>マ</sub>比<sub>ヒ</sub>又<sub>又</sub>サ<sub>サ</sub>の—くあきうゆる  
 とれとめ—給ひ安<sub>安</sub>夜<sub>夜</sub>良<sub>良</sub>米<sub>米</sub>たまひ—きませるな—うの—まや<sub>源</sub>橋<sub>橋</sub>か<sub>か</sub>  
 まむ—たまよりせ給ふひうらふ山のうげも  
 ま—のあけらむるも—てなん

あきる 〔俗〕 物事 <sub>イヤニナル</sub>を

あきらむる 〔ハハハハハ〕 他 <sub>イヤニナラレ</sub>を

あきる 〔ハハハハハ〕 物事思ひの外なるおようて心も

あきらめ 〔ハハハハハ〕 詞も及まぬをいふ ○ 惆

あきらめさる 〔ハハハハハ〕 他を—アキレサセルを

あきらめさる 〔ハハハハハ〕 同上

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 他 <sub>アキレラレ</sub>を

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 我がおのづから <sub>アキレラレ</sub>を

あきらめらる 〔ハハハハハ〕

〔蜻中〕 ともてあきまてぞあきる 〔歴添埃囊抄五 惆<sub>ハキ</sub>枕<sub>五</sub> あきまてはらるる  
 まらあせ世<sub>世</sub>なとれたるもをいふ 〔讃岐典侍日記〕 あきまてはらるる

あきらめられた 〔ハハハハハ〕 惆<sub>ハキ</sub>ころの甚—た状をいふあり 〔濱松<sub>三</sub>あ  
 きたる—たまを思ひよう—びた—事た

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 又 夢のこもあき

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 物 <sub>あきらめ</sub>る

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 タウワクスル意なり ○ 惆<sub>ハキ</sub>榮<sub>榮</sub>月の宴<sub>宴</sub>あ

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 ま—う—ためを—あきまてはらる

あきらめらる 〔ハハハハハ〕 秋田の稻を刈り収るをいふ 〔夫<sub>十三</sub> あき  
 せぬ—たの村の秋を—あかりを稻の

あきらめらる 〔ハハハハハ〕

あき 〔音〕 あがたりの下よ注を ○ 幄<sub>宇</sub>蔵<sub>開上</sub>右<sub>近</sub>  
 のあき—う—を—を—左<sub>近</sub>のあき—う

あき 〔音〕 あきつを—出—て 又 同下 あき

あき 〔音〕 あきつを—出—て

あき 〔音〕 灰を水に浸し其上をとり衣服等の  
 垢を洗ひ又紅紫あきを染る不用なる其

あき 〔音〕 色を鮮しせんが爲なり

〔和〕 灰汁<sub>阿</sub> 淋<sub>阿</sub> 灰<sub>太</sub> 流<sub>久</sub>

あく ⑥

あく 加キクケ

の上の灰汁より出て蕨鷄兒腸などの液汁  
澀味をいふ専ら菜蔬ふりふ語なり  
職のあく又手あはふなるさどそのさなり  
更科日記のねんあはふは國どめをぢめく  
たりたるふ白河院  
此人を成給ふ

あく 加キクケ

あける ㄱㄱㄱㄱ

枕五 ちだかりしをすねらぬあはふをさし出  
たまはらうのあはふさあはらうさまはらう

あく 加キクケ

あかまる ㄱㄱㄱㄱ

あかまる ㄱㄱㄱㄱ

あかまる ㄱㄱㄱㄱ

あかる ㄱㄱㄱㄱ

あかる ㄱㄱㄱㄱ

あかる ㄱㄱㄱㄱ

源紅葉賀 あああくかくるここの口なま給ひはけりな見るめああくのまきまは  
ここのまよ又手習 小島のいろをたぬふちぎり給ひをなまてとく  
おのひ聞えんをこまわくあははたるこままを古今春上 櫻花もるこま  
もる年だも人のこまはあまらせぬ又旅 手向まのつぐりの袖もまら  
べさふ紅葉ふあまら  
神やかしまむ

あくい ⑥

あくらもち ⑥

あくえん ⑥

あくかのぎ ⑥

他はアキラレルを

我があのがらうアキラレルを

あきであるを

いふなり

いふなり

いふなり

いふなり

いふなり

いふなり

いふなり

いふなり

言

あぐがらま サシスセ

心をあぐがらまなり ウカレサセル 蜻中 かゝのこあぐがらま

あぐがる レルルレ

あぐがる コ、ロ、ウカレル をりふ居るべ 類名 源若紫 源若紫

あぐがま カキクケ

あぐがま コ、ロ、サダマラデアルク をりふなり 源野分

あぐがま テツツルツレ

あぐがま コ、ロ、ウカレテイル をりふなり 源蓬生 侍従

あぐがま クシキ

あぐがま 其處を離る 源葵 なれ か

あぐがま サシスセ

あぐがま こゝろのうらま 其處を 源若紫 か

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 宇國謙中

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫

あぐがま コ、ロ、ウカレハシメル をりふなり 源若紫



あゝぎやう (音)

あゝぎやう (音)

あゝぎよ (音)

あゝげん (音)

あゝごう (音)

あゝさう (音)

あゝど (音)

あゝど (音)

あゝら (音)

あゝら (俗)

ワルイオコナヒなり ○悪行 平家三たじあゝ

ぎやうあゝぶあそんまをいかにあまらんとて

八虎の一なり又道二逆ひて悪一き

行ひまををりへり ○悪逆

鯨などの人の害をなす

ののをりふ ○悪魚

人を罵り辱かむる

なり ○悪言

上小同ト

○悪口

人相のよからぬ

なり ○悪相

ワルイコトなり

○悪事

人の害をなす虎狼の

類をりふ ○悪獣

あゝき病をりふ 戸令 凡并妻須有七出之

状云々七悪疾皆夫手書并之

木名とあゝら

下小注也

あゝらん (音)

あゝどん (音)

あゝどや (音)

あゝやう (音)

あゝや (音)

あゝや (音)

あゝや (俗)

あゝや (俗)

あゝや (音)

あゝや (音)

あゝせん (音)

ワルイコトなり ○悪心 大鏡五 あゝらん

ねらふはふのあゝらなり

あゝらなり

○悪神

人の害をなす大蛇

なり ○悪蛇

ウマレツキガワルイ 又轉して淫奔

なり ○悪性

ワルキサケをりふ

○悪酒

佛家小地獄餓鬼畜生を三悪趣とりひくも

小修羅を加へて四悪趣と云なり ○悪趣

木名とあゝひりのきの

下小注也

悪野狂の義遊女らふひなどま

身モチワルキワカモノを

りふ ○悪少年

鹿悪の錢を云 三實土 貞觀七年六月十日

已未禁京畿及近江國賣買之輩擇并惡錢

あ〜せん俗

あ〜そろう音

あ〜ぞめくぞ俗

の〜の轉め〜をなるを又  
轉〜その〜をなるなり

あ〜た

水ぶき〜うきなげせども  
ま〜ろり〜ろりよ

あ〜た音

あ〜たい音

あ〜たいをつ〜俗

あ〜だう音

正〜から〜る業を〜  
得る錢を〜

如法を〜らぬ僧あり盛衰ニ興福寺の大衆の中  
ふ東門院の觀音房勢至房と云惡僧あり

人のアラを〜ふ〇芥藻屑の義なるを上  
のあ〜た〜つ〜を〜た〜なり又〜の

ちりあ〜たのあ〜た〜  
〇芥散木下あ〜た〜た〜た〜た〜

人の腹中ふ生むる虫なり  
和蛇虫俗云加又  
云阿久太

あ〜た〜りを〜りふ轉〜  
惡言を〜りふ〇惡態

人のあ〜た〜りを〜  
りひたつるなり

佛家の語なり地獄餓鬼畜生等の惡道を云  
榮〇あ〜た〜た〜た〜た〜

さ〜さ〜のあ〜た〜念佛をの〜き〜ん〜の君〜  
ま〜り〜な〜り〜を〜た〜

あ〜たう音

あ〜たう俗

あ〜たふ

あ〜たむ

あ〜ためくた俗

あ〜たら常陸俗

あ〜たきもの俗

あ〜たよ音

あ〜つ三陸俗  
越後

ワルモノナカマを云東十九  
六日率五十餘人惡黨亂入寺領及刈田狼籍

あ〜たのあ〜た〜てある處を  
りふなり和糞堆阿久  
太布

虫名つものむ〜の下注  
本和蜚蠊和名阿久  
太布

あ〜た〜の〜  
下注

木名も〜ぎりの  
下注

アバレモノを〜  
りふなり

ミニクランナを〜  
醜婦なり

き〜を〜  
〇跟

言部 卷一

あくと 音

あくと 音

あくなふ 音

あくなん 音

あぐせうちう 音

あぐせん 音

あぐせん 音

あぐせん 音

あぐのぞ 音

帷次國司就幄座 江次十九 西三 起坐著幄座 軾面上

ワルモノナカマをりふあかり

東八僧招卒惡徒浪人等

ヒチクドキ 音 宇蔵閣中 あら

馬のハネルをりふ 音 類名 沛艾タカ ○おふい仇

ワレイヒト 音 爲の意なり

○惡人

薩摩のあぐせんより

出る焼酎なり

よかりぬ事を思ふ

心なり ○惡念

○倦勞

他をりて アグネサセルを

節會御即位方より南殿の大庭不幕を打

てつらつたるわらやをりふ 儀式三 歌人先入

あぐのむい 音

あぐむ 音

あぐむ 音

あぐむ 音

枕ニ あぐむをいぬのむい

あぐむ 音 紀伊熊野 音

あぐむ 音

あぐむ 音

枕ニ 御々々いぬのむい

あぐむ 音

惡事をいふふなり

行ひあぐむ老女を云ふて惡波の音なり轉

トてい婦女を罵てりふ詞ふなり

惡き馬をいふ

あぐむ同

あぐむの體言なり 字 吹去 開口出氣之 類名 吹

吐 又上氣 アツク 源朝良宮もあぐむ 給ひて

草名 あぐむひの

下小注を

拙き手跡を

倦疲たる時自ら口開き息出るを云 ○欠

類名 嗎 マ 榮 後悔大將 あぐむをせ給ひ

ワルイカゼ 音 害をまゐる風をいふ ○惡風

あくま 音

悪磨とかきて磨いた梵語あるを後二對譯の字小其義をあらせんとて石を除き鬼と

あぐら 音

加一魔の字を造りたるは俗字なり ○悪魔 宇初秋 又あぐら 身のうまひやあらん 飽きより出て十分の意なり 宇國談上 ひろい 御書あぐら 御手なりひあぐら

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

あぐら 音

宇後蔭あつるの春よりきげの林より西は木をたふまをのころゑこ  
るうおきらぬ源桐壺あつるの春坊まねまり給ふもゆりこひきこま  
わうわや  
せうと

あつる ケル ケル ケル ケル

戸などあつるをりふまり道など  
あつるもあつるをりふまり道など  
○開

あけらる セ シ ス ス

他は物をアケサセルを  
りふ

あけらる ム シ ス ス

同上

あけらる ル ル ル ル

他は物をアケラレルを  
りふなり

あけらる ル ル ル ル

我がわのぐら物  
アケラレルを云なり

宇藤原君御倉あつる家司どもあつるかぎりの物どももさびりだして  
大なるあせ倉のあつるを何とて物とりりやまをり又六物のをりから  
福がわつるをさびり蔵どもあつるをさびり太平九佐々木判官時信を  
陣より打せられ賊徒道をあつるをさびり道をあつるをさびり  
あつる ケル ケル ケル ケル

手をあつるひまをあつるのあつるを  
アケサセルの意なり盛衰十七君を

手枕のなえさすく成よけり何し隙なく  
むつさるんがくもせぬもの故

あつる ケル ケル ケル ケル

物を進めアゲルを  
りふ○上

あげらる セ シ ス ス

他をいへ物を  
アゲサセルを云

あげらる ム シ ス ス

同上

あげらる ル ル ル ル

他は物をアゲラレルを  
りふ

あげらる ル ル ル ル

我がわのぐら物の  
アゲラレルを云あり

景行紀是蝦夷不可近就於神宮進上於朝廷續紀十冠位一階上賜事乎  
始榮浦の別母北方あげ奉まことせん一あつる云々さうりもめあつる  
やうも侍うあつるあつるさうりもめあつるさうりもめあつるさうりもめあつる  
太平九さうりも峻き南の坂を人馬お息もつるせむゆりもさうりもめあつるさうりもめあつる

あつる ケル ケル ケル ケル

物を擧を  
云なり

あげらる セ シ ス ス

他をいへ物を  
アゲサセルをりふ

あげしむる

同上

あげらるる

他ノ物をアゲラレルを

あげらるる

我々のぐらら物のアゲラレルを云なり

あぐる

景行紀身長一丈が能扛鼎  
あげ世を奪むると危ふかるす  
髪をアゲルを云ふ

あげさきる

他をアゲルを云

あげしむる

同上

あげらるる

他ノ髪をアゲラレルを

あげらるる

我々のぐらら髪のアゲラレルを云なり

あぐる

神代紀上結髪為髻神功紀令三軍悉令椎結

万十六うわぬとなりのわらわらあぐる

あぐる

物の價をアゲルを

あげさきる

他をアゲルを云

あげしむる

同上

あげらるる

他ノ穀などの價を

あげらるる

我々のぐらら穀などの價のアゲラレルを云なり

○上舉結貴をどう物より冠れる漢字ハをさし

あぐるけふ

昨夜あつて今日と成るあり榮駒をひ糸も

あぐるつとあて

つとめい今朝といふ意なりあぐるけふと

あぐる

字菊の宴大宮あぐるつとあ

あぐる

本年の次のを云なり○明年

木をたがふまをのこころ名  
あつらひ

あつらひ

本日の次の日を云儀式三歌明各炊百黒并  
大多米三酒麴料飯 宇 儀の院 廿三日のひる  
かきよりたやまを給ひてその夜ひよわやま給ひてほろろききく大  
宮もむのわくまを給ひてあつらひひと日あやま給へば 以字 翌日ハ  
あつらひ 音

三公その下小位あつらひ故事よりて三槐よりて大納言の三公ハ亞  
官をまゝの亞槐よりてあつらひ 亞相よりてあつらひ 〇亞槐  
あつらひ 俗

あつらひ

マニムニ

あつらひ

ヲリルレ

蛇ふむむひてあつらひの國より  
この國より

あつらひ

あつらひのろを云持統紀直八級緋後撰雜  
玉よりてあつらひ 君身をあつらひ

悪氣をあつらひてあつらひをりふなり 宇俊蔭  
つらきつらきをつらぬきあつらひをりふなり

悪氣をあつらひてあつらひをりふなり

灰汁をりふなり

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

見尊乃歌之曰飲企都鄧利軒茂豆句  
志磨爾云此贈答二首号曰舉歌

あつらひ

あつらひ

あつらひ

揚戸をとむるあつらひを  
りふ 和 舉 鑑 須 阿 介 賀

あけがれ

あけがひ 周防(俗)

あげく (俗) 〇よのつら

あげく (俗)

あげくのよそ (俗)

あけくらませ カシスセ

後撰秋上 夜あけくらませをのふなり 宇俊蔭春の花をなぐ秋の紅葉をなぐめてあけくら

あけくら (俗) コキクシク

あけくら (俗) 〇吐瀉

あけくら (俗) 晴下

夜のあけくらませをのふなり 新古秋上 秋の夜の月やとくしのあまの原明方ちり沖の釣舟 介名文蛤不似て 穀小赤筋あり 連歌の擧句より出て 結局の義小云り 病人のときくらだ 上にあげく 〇吐瀉 同ト 日夜あけくらませをのふなり 宇俊蔭春の夜をあけくらませをのふなり 万十五 志のうらみ 安氣久禮渡うらまこぐ 晴下

あけくら

あけくら

あけくら

あげくら

あけくら

源野分八月の故前坊の 御忌月あけくらむのあけくら

あけくらをのふなり 〇朝暮 宇俊蔭 山小籠り

夜をあけくらむをのふなり 又あけくらむをのふなり 源野分 夜をあけくらむをのふなり

あけくらむをのふなり 前よわくそらの天あり 源菫菜

あけくらむをのふなり 又の典物を出し納 緋袍なり 頼政集 あけくらをのふなり

あけくらむをのふなり 朝あけくらむをのふなり 万三 あけくらむをのふなり



又十九 安氣左禮バよりりのきんばよ  
あけまきつるあけまきつるあ

あげい〜〜〜 (俗)

あけまきつる (俗) 上たろ〜

上たろ〜 縦横に組する戸なり黒塗白木共は用ぬ  
夜をあきぎるわど〜 源宿木あきまはたらん  
か移つるやま〜 あけ過ぬ〜 玉葉意ニまぬ〜

あけまき (俗)

あげだい (俗)

あげたし (俗)

あけたつ (俗) 刈刈ツテ

渡も貫之集あ〜 春宮御ふ〜 御使な〜 人のひもあ  
あ〜 遊女をよぶ 豆腐又の茄子を粗と油あ  
あ〜 蟬の打も〜 占今意ニあ〜

あげたりさげたり (俗)

あけの (陸奥南部) (俗)

あけつどら

あげつちもん (俗) あちもん

あげづめ (俗)

あけつらひ

あげつらふ (俗) たりり

あげつらも (俗) せせ

あげつらも (俗) せせ

あげつらも (俗) せせ

吾景 卷一

あけ

人を響又毀るなり〜 褒も〜

虫名あきりの 下小注を

雞の異名夫世 あり〜 明つげ馬の聲なり〜

門の屋の上お土を〜 庭訓性来 上土門冠木門藥醫門

已れ一人〜 遊女を〜 買きり〜

あ〜 の體言今昔 又此 論ひ〜

筋道ヲタテ 物を〜 〇論

他を〜 筋道ヲタテ 物ヲイハセルを

同上

他ハ筋道ヲタテ 物ヲイハセルを

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

あびつらるる レリルレ

我々のつらら 筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物をりひて

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

筋道ヲテ、物ノイハレルを

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

あけのたまご あとの玉

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

朱くぬりたる玉垣をいふ 散木中 たゞのや

あびまじり ○あ

四方と上とをわらふ布めて幕の類なり  
揚張の義和幄和名阿波利大帳也齊明紀幕阿波  
御前小まじりあびまじりとせせんあびまじりとせ

あびび

○やまのまんな ○やまひめ ○あびびかつら ○あびびづる ○あくび

○あびべ ○あさうろ ○たぐ ○たとは ○まろまろまろ ○たんがや  
○こまのわづら ○まろまろまろ  
蔓生葉形長楕五葉一處小擷出を夏初嫩  
葉の間小細枝を垂三瓣の花を開淡紫と

白色と二品あり實瓜の形めて長二寸餘食ふべ  
字蘭阿波地和阿波地和阿波地以字山女阿波地下學通草山阿波地

あびびづら

上ふれを  
本和通草和名阿波地

あびびさー

つきあびびさー  
なり ○活櫓

あびびづる

あびびづらふ  
おなと

あけべ

草名あけびの  
下小注を

あけやの

暁と朝との間あり ○曙源木影さやうふ  
見えてあり

あけやの

あけやの 加賀俗

鳥賊の風乾したる  
りのなり

あけやのさ

櫻の異名藏玉集曙草吳竹集春告草曙草  
夢見草吉野草二日草など櫻の異名あり

あけやのさう

葉形車前の如く三縦紋あり秋白花を開  
五瓣錢の大きめて青黄小點あり ○樟牙菜

あけやのそめ

紅又紫などあり處々暈を  
なしたるものあり

あびまじ

小児の髻を兩方わけて結たる形上古み  
づらの餘風なり 催馬樂 安介万支也止宇

止宇比呂波加利也止宇止宇加利天  
稱太禮止毛和総角和名阿波地結髪也

あびまじ

両方小輪を出し中を石たしむまじり  
紐をりふ甲冒すものかざり小用ぬる

雅装あびまじりつけてあびまじり  
あびまじり

あびまじ 阿波俗・きんらん

紫玉簪の細葉やう  
りのなり

あびまね 俗。あびまね

あびまね 紀伊俗。たのまね

あびまね

あびまね 俗

あびまね

なり狭四一の宮の御あび

あびまんぢう 俗

あびもち 俗

あびもちある 井キルキレ

あびもの 俗

介類、竹煙の属長さ二寸餘、一頭より

西の紐を出さぬのあり ○煙

介属、形圓扁やして面五出の

花形あつものなり ○海燕

神樂又催馬樂の

曲名 ○総角

あびまねの

下注を

童子の髪を居たるを成人して

その髪を脱上たるよその髪をよその髪

油煎の饅頭を

油煎の養を

人を下リタテルをいふなり

持統紀不惟錫忠宣揚本職

麩粉を衣とて油めて煎たる食物を云

多く菜蔬の類よりいふなり 魚を煎たるを

てんあらし

あびものや 俗

あびや 俗

あびやまね 刈刈キ

あびやまね 刈刈ル

あけゆく 加刈刈

雲かきしきしあけゆく

あけらるん 俗

あげる 俗

あげむなま サシ刈セ

油めてあがれる食物を

いふ家なり

遊女を招ぎあげ

遊ぶ家なり

夜の早くあつるをいふ 宇藏開中

くあつるをいふ 源若紫

夜のあつるをいふ 又夕顔

忙然とある

状をいふ

物を他みクレルを

半部又簾など見ればのりあがるを

うお見よこのわらへんべんどもとあざとたてて人々あやう見え侍りつと申せば大和下さしものぞねつりけるよきよがなるあざとともあげとて女どもあまをり

あけとれる 三川川

らるやらめ

夜のあやゆをいふなり 新拾春上 あざとたる空あきらもく久々のりとの関を

あげを

あこ

冠の緒の下注も 今昔共冠の上綾の長りうけも世の人上綾の主とあん付たりける、あざとの下注も

あこ

神たち 原 帚木 さりともあざの

あこ 音

下火の轉音 焔 焔の時 火を付る人をいふ 草名のあんどりの下注も

あこ 伊豫 俗

あご 遠江 俗

獸名、うりの下注も

あご 中國九州 俗

魚名、とびのうをの 下注も

あご

アヒキをりか 万三 大宮のうらまでききあわびきまを 綱子とのあまの呼聲

あご 俗

あぎの下注も

あご 俗

あぎの下注も

あご 俗 どんかうざ

天仙果に似たる樹ありて 琉球のかぐさると一類別種なり ○榕樹

あご 薩摩 俗

松茸に似て長さ四五寸傘をくらむ香氣きりのなり

あご 俗

魚名、あごの下注も

あご 俗

榕樹に生むる 菌あり ○榕耳

あご え

雞の蹴りあり 和距 阿古 雞雉脛有歧也

あどかたむね俗

草名よきもの  
下注せ

あどがらむヤシシセ

身のおちつうぬ又心のおちつうぬそ我と  
ことか意を可カレサセルをりふ源若菜身を  
給ふ又帚木コウライハげよおひひすつ  
よまけけつるえきふかくもあどがらむさくち

あどがらむレルルレ

あどがらむおなげ 〇憧太平宮ハ又  
南山の道なき雲ふみまよくせ給ひて

あどがれたる御住居ときこめれど  
慶節浮宕加憧カ

あどぎ俗

人もちりぢん 〇この歌の意あて同し事を  
度々まじり出たる語なり

厭事をあどぎぬをりふ俗諺なり六帖あふ  
事をあどぎぬの島引鯛のたびさかちを

あどだ

つぎ小注せ 御湯殿記天正三年 六月新大  
まひどのよりあどだすあるをつたりめし

あどだうり 〇あどだうり  
〇あどだ

わうがらの一種形小ありて六寸許正圓ハ  
しそひびあく皮色赤 〇南丸  
ゴドモチの意なり 宇まの院さくらが  
このあどだうりけあもり

あどたち

あこめ

あこめのうぎとあこめの紅よふぢあきねのわりものあり 又朝良さあの  
あこめみぎもきねび 〇どちぢのわき

あこめきぬの略なりあこめきぬの下ハ  
注と源繪合こころハ六人あうのうさくち

あこめ

萌木ももも着を云々常あ大臣以前萌木大臣以後  
紅也 饒抄上公卿用赤袖社年之人着赤袖  
男子装束下用あるなり 後照念院装束抄  
東帯下袖事知足院殿仰云公卿ハ蕪芳をも

あこめぎぬ

婦人童女の服なり  
和袖阿古女 女人近身衣也  
込の異名 春兩抄+ あこ  
めの花

あこめのよな

あこや

あこやだまの  
下注せ

あこやがひ

〇あこやがひ 〇あんどがひ 〇そぞがひ 〇てがひ  
〇あんがひ 〇のぶつらがひ 〇たまがひ  
大き二寸より六七寸小至る外面粗糙て蛸房の  
ぐと 殼縁甚薄し紙の如し 〇珠母

あこやだま

〇あこや 〇あちたま  
〇かひのたま 〇あんがひのたま  
あこやがひより出る珠なり 銀  
色光澤ありて微し透とわり

瑪瑙の如くわらわりのを上品とて六帖三の世の海あまのまらうとのあ  
らや玉とてこの後ふらひのあまけん山家下あらやとてらひのあらを  
つらわとて實のあらと見えらありけり○あらやがひの肉の桃紅  
して一邊の毛あり淡菜の毛の如く此肉を食用とて西行の詠めら  
らひの蓋珠母

あらやがひ俗

あらやがひの  
下み注せ

語彙卷一

